

16. プログラム・マネージャー：原田 博司

研究開発プログラム：社会リスクを低減する超ビッグデータプラットフォーム

■ 平成 27 年度 研究開発プログラム実績

○ 研究開発プログラムの構想

全世界にはネットワークに接続できるセンサデバイスが約 1 千億個以上もあるが、実際に接続されデータを送り出せるデバイスは平成 25 年時点で数%しかない。しかも数百億のデータを数分単位で処理できる基盤に至っては皆無である。そこで現状のビッグデータの処理を遙かに凌ぐ「超ビッグデータプラットフォーム (PF)」を構築する。さらに本基盤により、国や地域の公的医療データや連続計測データを活用した予見先手ヘルスケア・医療サービスにより、健康寿命延伸と医療費削減に役立てる「ヘルスセキュリティ」を実現する。また工場群へのサイバー攻撃の撲滅や、1000 台規模の工場内制御機器群をつなげて生産性と利益向上を支援する「ファクトリセキュリティ」を実現する。

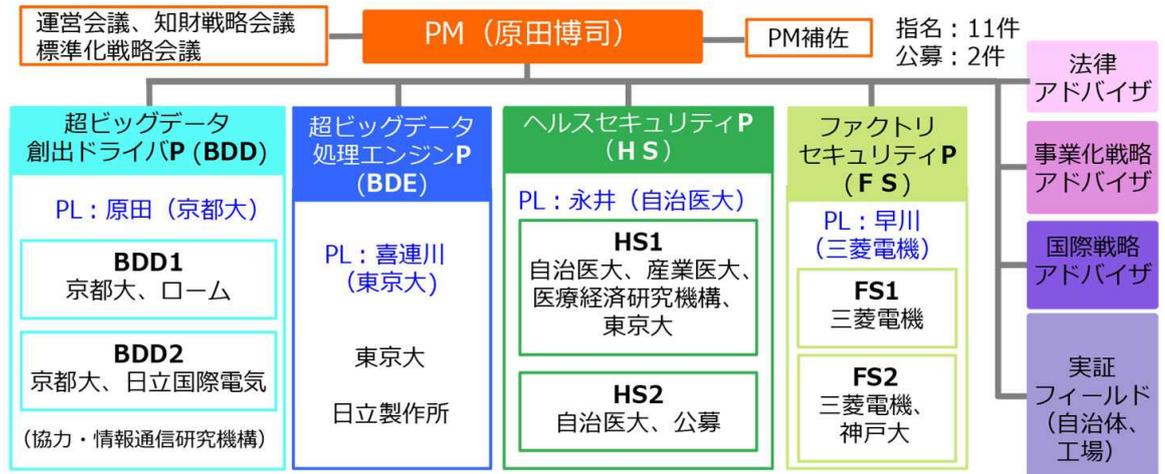
○ 研究開発プログラムの進捗状況

平成 27 年 9 月の総合科学技術・イノベーション会議 (CSTI) で PM として採用決定後、研究開発プログラムの作り込みを行い、12 月 10 日の CSTI 革新的研究開発推進会議で研究開発プログラム全体計画が承認された。プログラム構想の実現に向けて「超ビッグデータ創出ドライバ」、「超ビッグデータ処理エンジン」、「ヘルスセキュリティ」および「ファクトリセキュリティ」の 4 つのプロジェクトからなる研究開発体制を構築し、うち 1 プロジェクトで研究開発を開始させた。平成 28 年 3 月末現在、本プログラムの研究開発体制は延べ大学等 3 機関、その他 1 機関となっている。また、平成 28 年度以降に追加する研究開発機関の選定や、4 つのプロジェクト毎および横串的に開発する機器の仕様やデータ受け渡しに関する課題等の抽出を行う等、本格的プログラム始動に向け土台作りを進めた。総じて、本プログラムの構想実現に向けて順調に推移している。

○ 研究開発プログラムの実施管理状況

本プログラムでは、第一線級レベルの研究者が集結し、IT (情報技術) と CT (通信技術) を融合した超ビッグデータ PF を開発するとともに、この基盤上で動作させる医療および工場ものづくりにおける社会リスクを予見先取型で解決を行う。実現のためには初年度より成果物の統合・実証・標準化・実用化・商用化の横断的な連携プロジェクトを行うことが重要である。その連携強化のため、各プロジェクトリーダーの出席による月次運営会議を 6 回開催し、各プロジェクト間でのビッグデータ受け渡し、成果の水平展開等連携に係る課題の解決等を進めた。また個々のプロジェクトについても、他プロジェクトの研究者の参加可能なプロジェクト会議を 4 回開催し、研究者間の連携を図った。

■ 研究開発体制 (2016年6月現在)



(参考) 特許・発表・論文数等

特 許				他の産業財産権合計 (商標、意匠など)			
出願件数		登録件数		出願件数		登録件数	
国内	海外	国内	海外	国内	海外	国内	海外
0	0	0	0	0	0	0	0

会議発表 (総数)			(国際会議発表分)			(国内会議発表分)		
発表数	発表数の内、査読有	発表数の内、招待	発表数	発表数の内、査読有	発表数の内、招待	発表数	発表数の内、査読有	発表数の内、招待
0	0	0	0	0	0	0	0	0

※ 発表数は、招待講演、口頭発表、ポスター発表の合計を記載してください。

論文数 (総数)		(外国誌分)		(国内誌分)	
発表数	内、査読有	発表数	内、査読有	発表数	内、査読有
0	0	0	0	0	0

※ 原著論文、Proceedings、総説などを含む

表彰件数	0
------	---

書籍出版件数	0
--------	---

報道件数	0
------	---

■ 各研究開発機関からの年次報告

Web ページにて公開：

URL：<http://www.jst.go.jp/impact/report/16.html>